富山県福岡町

埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ

2003年3月
福岡町教育委員会

序

水・みどり・新しい風。福岡町は自然に恵まれたところです。深く豊かなその恩恵は、私達の先人へと古くからもたらされ、旧石器時代まで遡る町の歴史は町内各地に足跡を残しています。

さて、近年の埋蔵文化財行政の充実ぶりは目を見張るものがあります。当町におきましても各所で発掘調査が行われ、また文化財を活かした町づくりも検討されつつあります。多種に渡る文化財の中でも埋蔵文化財は、実際に発掘するまで目にすることが出来ず、しばしば開発事業の障害と見られることがあったことも事実です。しかし、その一方で個性を求められる町づくりの基本資源として、遺跡の存在は無視できないということもまた事実といえるのではないでしょうか。

目に見えにくい埋蔵文化財包蔵地を出来うる限りの精度を持って明らかにするため、町では今年度より５年計画で町内遺跡詳細分布調査を実施することとしました。地道な分布調査に基づく遺跡地図の充実は、将来の町の発展に寄与するものです。本報告書がその役割を担う一助となることを願います。

調査の実施にあたり御協力と御理解を頂きました地元の方々、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成15年３月

福岡町教育委員会

教育長　石田　伸也

例　言

1．本書は福岡町教育委員会が国庫補助を受けて実施している町内遺跡詳細分布調査の１年目（2002年度）の分布調査報告である。

2．調査は福岡町教育委員会が主体となり実施した。

3．調査事務局は福岡町教育委員会生涯学習課に置き、文化財保護主事栗山雅夫が調査事務を担当し、教育次長佐伯邦夫が総括した。調査担当者は次のとおりである。

福岡町教育委員会　生涯学習課　文化財保護主事　栗山雅夫

4．本書の編集・執筆・写真撮影は、福岡町教育委員会文化財保護主事栗山雅夫が担当した。

5．本書の図版の遺物番号は実測図・写真図版ともに統一している。

6．遺物実測図のうち、施釉部分は１点破線で示した。

また、煤が付着した部分は、アミフセで示している。

■煤付着部分

7．現地調査・資料整理・報告書作成にあたって、下記の参加を得た。

竹下真由美

8．採集遺物及び記録資料は、福岡町教育委員会が保管している。

9．現地調査及び本書の作成に際して下記の諸氏・関係機関から御指導・御教示・御協力を得た。記して謝意を表します。

越前慶祐・高梨清志・宮田進一・富山県埋蔵文化財センター

目　次

序

例　言

目　次

第1章　はじめに

第１節　位置と地形 …… 1

第２節　調査に至る経緯 …… 1

第３節　2002年度調査地区の概要 …… 2

第2章　調査概要

第１節　調査の経過 …… 5

第２節　調査の成果

Ⅰ　遺跡各説 …… 5

Ⅱ　小　結 …… 10

図版目次

第１図　福岡町位置図 …… 1

第２図　調査地区割図 …… 3

第３図　2002年度分布調査対象地位置図… 4

第４図　遺物実測図（１）…… 6

第５図　遺物実測図（２）…… 7

第６図　遺物実測図（３）…… 7

第７図　遺物実測図（４）…… 8

第８図　遺物実測図（５）…… 8

第９図　遺物実測図（６）…… 9

第10図　2002年度分布調査成果図 …… 11

写真図版

図版１　航空写真（1946年撮影）

図版２　遺跡写真（１）

図版３　遺跡写真（２）

図版４　遺跡写真（３）

図版５　遺跡写真（４）

図版６　表採遺物　俯瞰写真（１）

図版７　表採遺物　俯瞰写真（２）

図版８　表採遺物　俯瞰写真（３）

表 目 次

第１表　時代別採集遺物一覧 …… 5

第２表　調査遺跡一覧 …… 10

第1章　はじめに

第1節　位置と地形

福岡町は富山県西部にあり、県のほぼ中央に位置する呉羽丘陵を分水嶺とする「呉西」地域に含まれる。本町はその中でも北西端に位置しており、町北西部では石川県と県境を接している。町域は58.62km²あり、その1/4を平野部、残る3/4を丘陵部が占めている。南東方向に広がる平野部と北西方向に広がる丘陵部の境界付近には小矢部川が流れている。平野部は、砺波平野の北西端に位置し、小矢部川と庄川によって形成される複合扇状地の扇端部である。一方、丘陵部は宝達山を主峰としながら能登半島の山々に連なっている。

第1図　福岡町位置図

平野部は北東に流れる小矢部川によって区分され、「川西」「川東」と通称される。「川東」は、扇状地扇端部にあたることから湧水面は高く、地下水の豊富なところと言える。また、河川の氾濫原であったことから、圃場整備が行われる以前は沼状地形が目立つところでもあった。現在、そうした地形は昭和の圃場整備により水田へと姿を変え、地形の起伏や湧水地は地下に姿を消している。

第2節　調査に至る経緯

福岡町の埋蔵文化財包蔵地は、昭和47年（1972）に富山県教育委員会文化課により発行された『富山県遺跡地図』、そして平成5年（1993）富山県埋蔵文化財センターによって発行された『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』を用いて、遺跡の把握と周知に努めてきた。この期間の遺跡数の変化をみると、前者で39箇所であったものが後者では87箇所に増加している。さらに、平成５年以降に新たに追加された遺跡を加えると、今回の分布調査を実施する前には103箇所まで増加している。

こうした変化は、新たな開発行為によって未確認の遺跡が発見されたことによるところが大きい。ところが、遺跡範囲については、昭和47年のものは大半が遺物採集地点を記す点的なものに止まっており、精度は高いものではない。さらに、平成５年の遺跡地図については遺跡範囲を示したものが大半を占めるものの、未踏査の場所や遺跡の境界について開発行為との折衝資料として十分に対応できない場所がしばしば認められるものであった。

近年の埋蔵文化財行政の進展は、埋蔵文化財の保護意識を大きく向上させている。このため、遺跡の有無を確認することは、開発側にとって事業計画の円滑な遂行を図る上でその行方を左右する重要な要素と位置付けされてきており、遺跡確認の第一段階である遺跡地図の精度は高いものが望まれるようになりつつある。

振り返って当町の遺跡地図をみると、前段の地図を継承し加除修正したものを採用しており、依然として未踏査部分が大半を占めている。開発行為に先立つ分布調査などによって新たに確認される遺跡は増加傾向にあり、今後の遺跡保護体制を高いレベルで確立するためにも高精度の遺跡地図を整備しておくことは文化財保護サイド、開発サイドの両者が望むところであり、５ヵ年の計画で詳細分布調査を実施することとなった。

第3節　2002年度調査地区の概要

今年度の調査対象地は旧大滝村にあたる荒屋敷・本領・大滝・開碆・木舟地区で、東西約２km南北約2.5kmあり、面積は約４km²を測る。

旧大滝村は昭和15年（1940）に福岡町・山王村と合併して福岡町となり、さらに昭和29年（1954）には西五位村・五位山村・赤丸村と合併することで現在の福岡町が形成されている。福岡町史には以下の伝承が記録されている（『福岡町史』福岡町史編纂委員会；1969）。

①大滝村は古くは大竹浦とされ、17世紀中頃の史料に「大滝村」が「大竹村」転化したものとされていること。木舟城下として栄えていた頃は、「大滝町」とされ、上杉謙信の兵火に遭った記録が残されている。

②本領は、もと本領村と八百村から成り、延宝７年（1679）に本領八百村になった。本領村の由来は木舟城主の石黒太郎光弘が領有したこと。また八百村は木舟城下の「八百屋町」があったため。

③開碆は木舟城築城後、次第に開拓を行って村を形成するに至った。

④荒屋敷は、寛正２年（1461）木舟城主石黒氏が新しい屋敷を築いて木舟城の支城にしようとし、「新屋敷」が転化した。

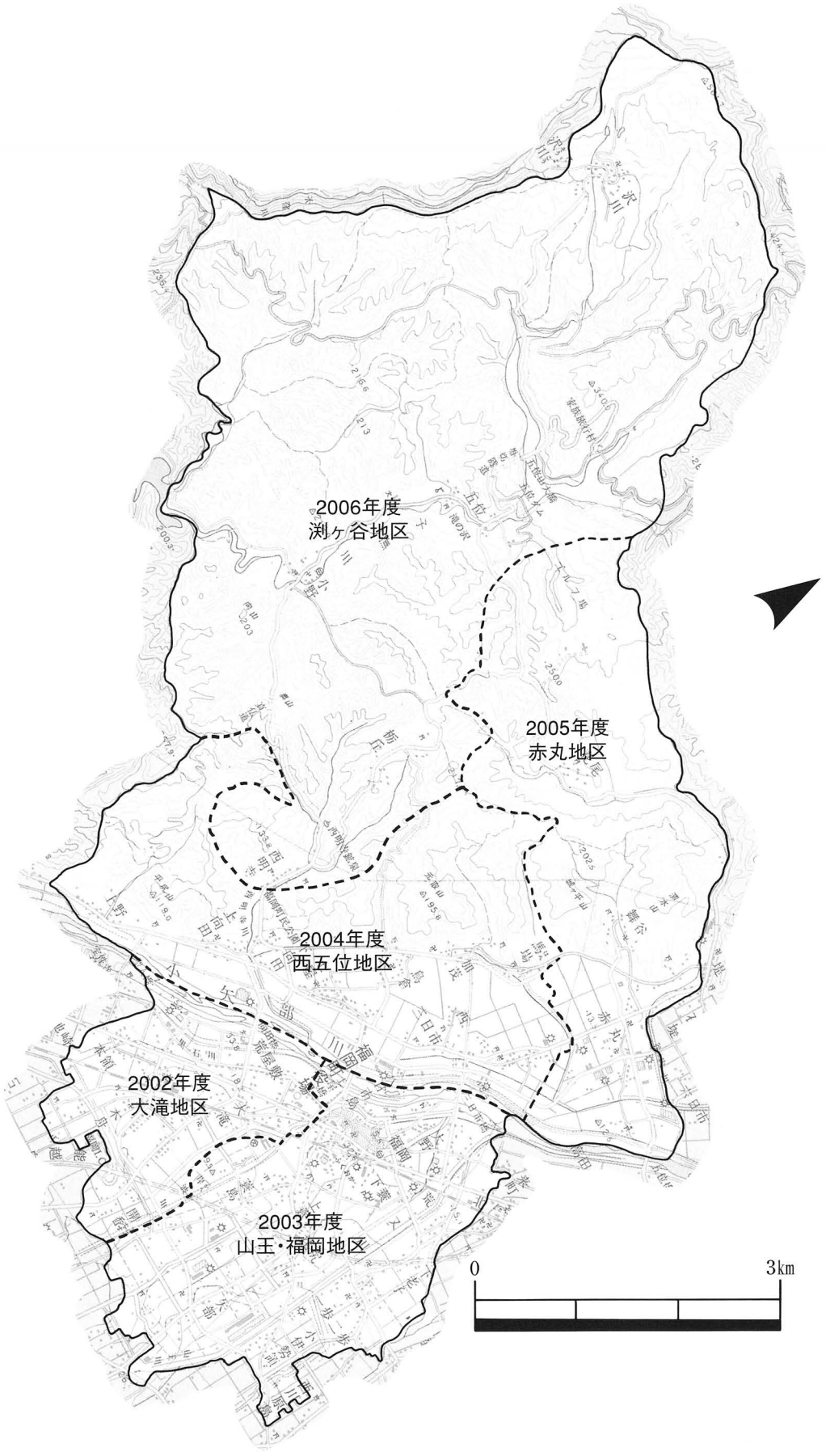
⑤木舟は承安２年（1172）山城国愛宕郡鞍馬村の住人糸岡刑部が貴布祢神社の分霊を奉じて来村・開拓し貴舟村と称したものが転化した。

このように、当地域には中世の木舟城に伴う伝承が色濃く残されており、その関係の強さを伺い知ることができる。

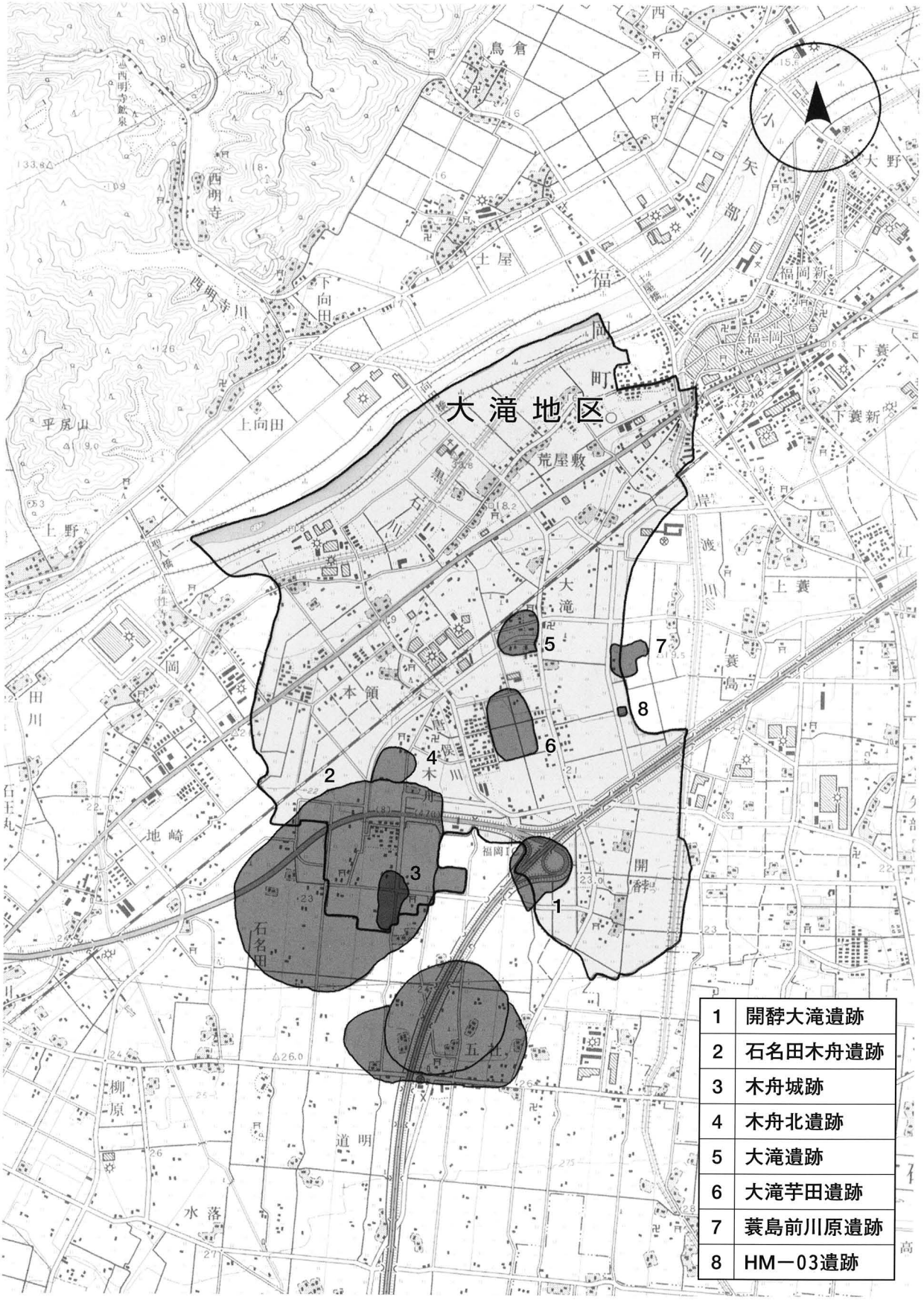
ここで遺跡の有様に目を転じると、分布調査以前、周知の埋蔵文化財包蔵地は7箇所確認されている。その中には県指定史跡である木舟城跡とその城下町遺跡である石名田木舟遺跡・木舟北遺跡・開碆大滝遺跡が所在している。このうち、石名田木舟遺跡・開碆大滝遺跡は能越道建設に伴う発掘調査が実施されており、大きな成果が挙がっている。これらの発掘調査は、当地域を県内有数の遺跡地として認識させる契機になるもので、その成果は近年調査報告書として刊行されている（『開碆大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告』富文振；2000、『石名田木舟遺跡発掘調査報告』富文振；2002）。また、木舟城跡についても町教委により発掘調査報告が成されているので併せて参照頂きたい（『富山県福岡町 木舟城跡発掘調査報告』栗山；2002）。

さて、発掘調査による考古学的知見の広がりにより、当地域の歴史的基盤は中世に止まるものではないことが知られるところとなった。特に石名田木舟遺跡は古代集落を伴う複合遺跡であり、その規模や内容は県内でも屈指の規模を誇るものといえる。平成６年度に実施された発掘調査では、７世紀後半～８世紀初と考えられる瓦塔に伴う阿弥陀三尊像・卍崩し高欄・屋蓋や仏具関連遺物が出土しており、村落内寺院の存在も推定されている。（『富山県福岡町　石名田木舟遺跡発掘調査報告書』斎藤・橋本；1995）

発掘された遺跡や文献資料から、当地域が古代から中世にわたって砺波地方の中心地のひとつであったことが明らかになってきているが、天正14年（1586）の木舟城廃城は、急速な農村化を促進する「事件」とでもいうべき出来事といえるものであった。しかしながら、江戸時代を迎えると、大滝村は加賀藩十村役を務めた杉野家を輩出しており、近世段階においても相当の勢力基盤を有する地域であり続けたことが指摘できる。



第2図　調査地区割図（1/60,000）



1	開藝大滝遺跡
2	石名田木舟遺跡
3	木舟城跡
4	木舟北遺跡
5	大滝遺跡
6	大滝芋田遺跡
7	蓑島前川原遺跡
8	HM－03遺跡

第3図　2002年度 分布調査対象地位置図（1/25,000）

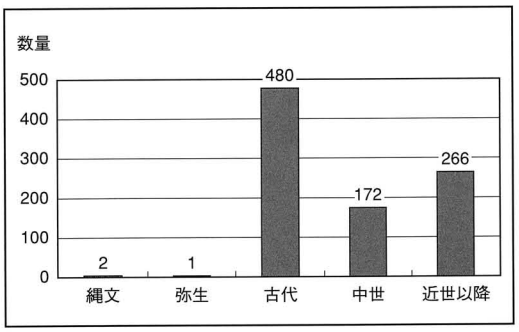
第2章　調査概要

第1節　調査の経過

調査は調査員と調査補助員の２名があたり、耕作期間を除いて実施した。踏査は田畠区画の大小によらず、１区画を最小単位としてその外周を１周歩くことを基本動線とした。特に大きな区画の時は必要に応じて中央を歩いて遺物を採集している。調査に際して、個人別による遺物採集の誤差を少なくするために最小人員の調査体制としている。本来ならば、田畠内を隅から隅までくまなく歩くのが理想ではあるが、人員・予算面に加え遺物採集の客観性を考慮した上で基本動線を決定している。客観性については、水田の田起こしをしているものとしていないものが並存していることに起因する。田起こししていない水田は、地表面が藁で覆われ表土を確認することすら不可能であり、調査以前の問題として、水田毎の誤差を生じさせるものである。また、採集遺物は畦畔ブロックなど水田の端付近で採集されることが多いという認識に異論はないと考えるが、当地の水田耕作を鑑みると田起こしをしていなくても排水溝だけを水田外縁に設けているものも多くみられる。上記の事柄から、効率的な遺物採集と原資料誤差を少なくする踏査方法は、水田外縁を１周することであると考え、この方法で調査を実施した。

現地踏査は実働で９日を費した。遺物は旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世と近世以降に分類した。新たに周知の埋蔵文化財包蔵地とする条件は、中世までの遺物採集地とし、地図にプロットした後、旧地形等を考慮して遺跡範囲を括っている。

分布調査の結果、遺物が採集された田畠は281枚を数える。内訳は縄文が２点、弥生が１点、古代480点、中世172点、近世以降が266点、時期不明１点で総数922片となる。この数量比からも古代と中世が本地域の遺跡の主体時期を形成することが理解される。



第1表　時代別採集遺物一覧

第2節　調査の成果

Ⅰ　遺跡各説

①開酵大滝遺跡（遺跡番号422079）：範囲変更

本遺跡は能越自動車道の建設に伴う調査により確認された。分布調査は平成３年、試掘調査は平成４年、本調査は平成5年に行われている。本調査面積は28,000㎡に及ぶ大規模なもので、16世紀後半の木舟城下町が確認されている。調査は町屋のほぼ全域を対象に行われており、遺構・遺物を検討した結果、鋳物師・鍛冶師・具足師から成る職人が居住した区域とされている。

今回の調査では古代須恵器１点と近世遺物を１点採集したのみである。これは、遺跡の大部分が能越道福岡ICに姿を変え、踏査対象の田畠が少ないことによる。旧地籍図をみると遺跡南から料金所－本線間を接続するループ状の道路東側外郭に沿って北へと流れる流路の存在を確認できる。須恵器を採集した地点はこの流路上にあり、二次移動したものと考えられる。この流路の存在から遺跡東限と南限はほぼ特定される。遺跡範囲は従前と大差なく、南北約400ｍ、東西約290ｍを測る。

②石名田木舟遺跡（遺跡番号422080）：範囲変更

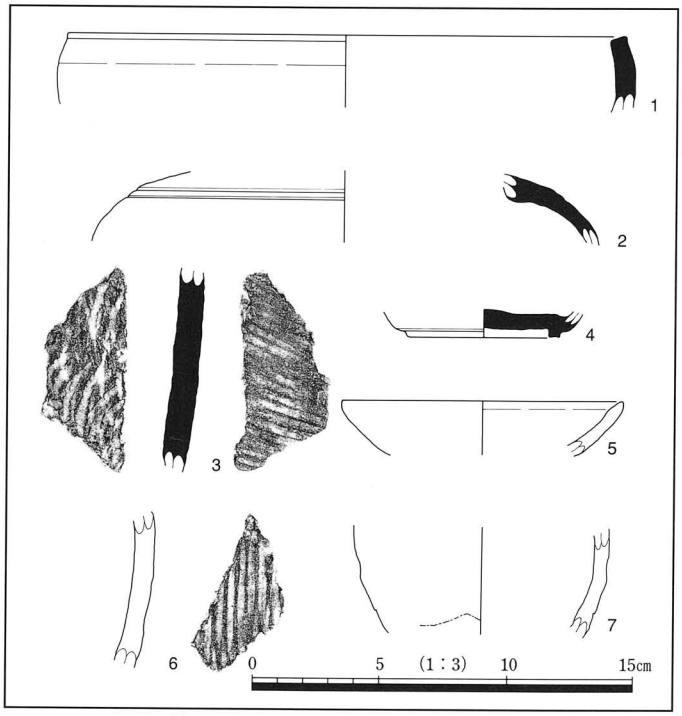
本遺跡は能越自動車道の建設を契機として発見された遺跡である。遺跡内には木舟城跡が所在する。分布調査は平成3年、試掘調査は平成４年に実施され、本調査は能越道へのアクセス道部分では平成５年～７年にかけて57,324㎡が発掘されている。

調査の結果、６世紀代の古墳、７世紀後半～９世紀の古代集落、15世紀末～16世紀の木舟城下町が確認されている。また、能越道建設に伴い周辺の道路整備も進み、県道西中大滝線の道路改良工事に伴う調査では村落内寺院の存在を示唆する瓦塔関係遺物が出土している。

遺跡の中心時期は古代と中世後期の二時期に大きく分けられる。特に木舟城下町として機能していた中世末には城下の中心地を占めており、県内遺跡では主に宗教施設にみられる礎石建物が検出されている。出土遺物も記年銘資料を含んでおり、木製品・金属製品・石製品・土器陶磁器類といった多種多様な様相をみせており、その繁栄ぶりを物語るものとなっている。

遺跡範囲はこれまでと比べ北西方向に若干伸び、南北約900ｍ、東西約900ｍを測る。採集した遺物は、古代28点、中世17点、近世以降11点で56点となる。このうち、１～４は須恵器である。１は鉄鉢形の鉢、２は壺の肩部で８世紀代に比定される。5は口縁端部を尖らせる中世土師器で16世紀代のもの、７は越中瀬戸の天目茶碗である。

遺跡の規模と比べ採集遺物は少なく感じるが、これは遺跡の東側全域において田起こしが行われておらず、地表面を観察できなかったことによる。



第4図　遺物実測図（1）（1/3）

③木舟城跡（遺跡番号422081）：範囲変更

今回の調査対象地で唯一、昭和47年『富山県遺跡地図』に記載されている遺跡である。現在、城域の一部は富山県指定史跡「木舟城跡」として保護され、木舟城跡公園として活用されている。

城の歴史は、寿永３年（1184）石黒太郎光弘による築城伝承まで遡る。天正９年（1581）まで国人領主石黒氏の居城として機能するが、織田信長の越中侵攻を契機として上杉謙信、佐々成政、前田利家の持城となる。城は天正13年（1585）の大地震により倒壊し、天正14年中には廃城されている。

町教委によって実施された範囲確認調査では、３つの郭が南北に並び、自然流路を利用した水堀が周りを囲む推定図が想定されている。発掘調査による出土遺物の年代は、16世紀代が主体となり、一部15世紀後半まで遡るもので、木舟城下町の中枢と考えられる石名田木舟遺跡の年代観と近似している。遺跡は南北に伸びる微高地上に立地し、その範囲は南北約230ｍ、東西約230ｍを測る。遺跡の東西を挟る谷地形内は自然流路が流れ、そこが城の東西境界ともなる。文献等には城東の貴布祢神社も城内とみるものがあり、そこまでを遺跡範囲としている。

採集遺物は古代３点、中世２点、近世以降２点の計７点となる。古代では須恵器・土師器、中世では瀬戸美濃の天目茶碗・珠洲、近世以降の越中瀬戸の皿などが出土している。

圃場整備による土砂の移動が著しく、北郭部分では中世面が遺存せず表土直下で古代面となることが発掘調査によって判明しており、古代集落として石名田木舟遺跡の一翼を形成している遺跡でもある。

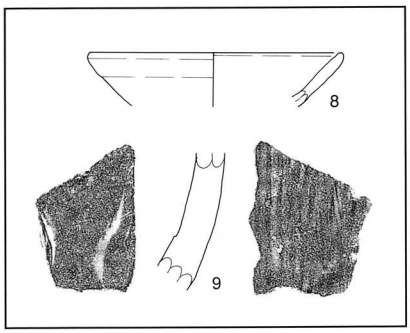
④木舟北遺跡（遺跡番号422081）：範囲変更

平成7年に行われた分譲住宅地の開発に伴う発掘調査では、木舟城下町の屋敷地が２区画分確認されている。出土遺物は16世紀代を中心にしており他の木舟城下町と同じ年代幅に収まるものである。調査の結果、多くの石組井戸を主体とする多くの井戸が検出され、３つの井戸が切り合っているものも確認されている。出土品の中でも、特に鉄製の轡や県内初例となる無文銭は注目される。

遺跡範囲は南北約140ｍ、東西約300ｍを測る。調査以前に比べると東に広がる形となる。これは、旧地形上では同じ微高地上に乗る部分、遺跡東端は旧流路（木舟川）までを範囲内としたことによる。

採集遺物は古代２点、中世４点、近世３点の計７点となる。古代では須恵器・土師器、中世では中世土師器・瀬戸美濃天目茶碗・青磁、近世以降では砂目積の肥前染付皿・越中瀬戸皿・擂鉢を採集した。８は中世土師器で口縁端部を面取りし、内側に丸くおさめ16世紀代に比定できる。９は珠洲焼の甕底部近くの破片である。

遺跡範囲の東半分は稲藁により地表面を確認できなかった。



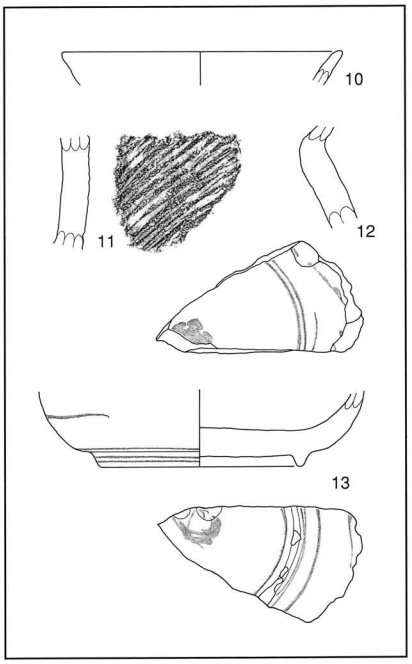
第5図　遺物実測図（2）（1/3）

⑤大滝遺跡（遺跡番号422085）：範囲変更

これまで何度か試掘調査が行われているが、保護措置を要する遺構等は確認されていない。古墳・代・中世・近世の遺跡とされているが、遺物の散布状況からは、近世段階が主体時期と考えられる。

採集遺物は縄文1点、古代22点、中世12点、近世以降39点の計74点である。古代では須恵器の杯類・甕壺類・土師器、中世では中世土師器・瀬戸美濃天目茶碗・珠洲・八尾、近世以降では越中瀬戸の碗皿類、肥前陶磁等がみられる。12は珠洲の壺頸部で焼成は甘い。13は見込みにコンニャク印判の五弁花を施す18世紀代の伊万里の皿である。

遺跡範囲は微高地にのって北及び北東方向に広がり、東西約410ｍ、南北約510ｍを測る。空臨寺周辺でも珠洲擂鉢や瓦質土器など中世段階の遺物が採集されたが、旧地形ではその付近に水路が走り谷地形が潜んでいるため範囲外とした。北東方向への広がりは微高地上に乗るかたちで遺物が採集されており遺跡内とした。北側でも微高地に近い部分では近世段階の遺物が多く採集されている。



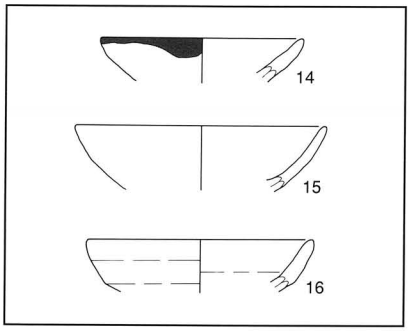
第6図　遺物実測図（3）（1/3）

⑥大滝芋田遺跡（遺跡番号422090）：変更無

大滝・蓑島地区で計画された圃場整備事業に伴い平成９年に実施した分布調査により発見された。平成９年に分布調査を実施した場所については、今回現地踏査対象から除外している。遺跡の範囲は約南北280ｍ、東西約200ｍを測る。遺跡の南側は自然流路と谷地形が潜んでいるため、その部分を外し、微高地上で遺跡範囲を括っている。

採集遺物は古代３点、中世23点、近世以降が82点の108点を数える。これは秋の田起こし後に水田を全面的に踏査したためであり、今回の詳細分布調査とは調査手法が異なっていることによる。

古代では須恵器杯・土師器、中世では中世土師器・青花・瀬戸美濃碗皿類・珠洲、近世では肥前陶磁を中心に越中瀬戸が混じるような組成で遺物を表採した。14・15は15世紀後半～16世紀の中世土師器、16は瀬戸美濃の丸皿で灰釉が施釉される。



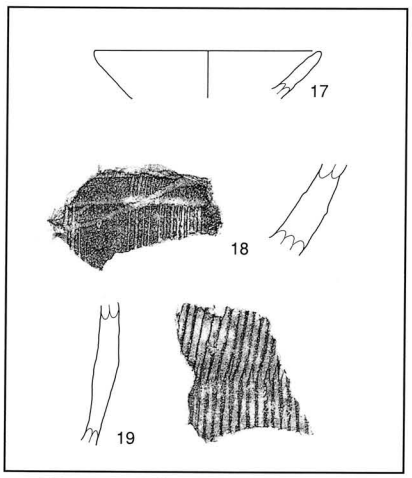
第7図　遺物実測図（4）（1/3）

⑦大滝島田遺跡（遺跡番号422098）：遺跡名称変更（旧HM－03遺跡）・範囲変更

蓑島地区の圃場整備事業に伴って平成11年に実施した分布調査で確認された。事業着手前にＨＭ－03遺跡として試掘調査を実施する予定であったが、事業区域から除外されたためそのままとなっている。

分布調査時は珠洲焼片が採集されていたが、今回の調査により遺跡は西側に大きく広がる。旧地形図では既存遺跡部分は湧水地に近いが、今回の遺物採集地を加えると北西方向へとひろがる微高地上に乗る。遺跡の範囲は南北約410ｍ、東西約510ｍを測る。

採集遺物は中世12点、近世以降10点の計22点を数える。この結果は調査前までの遺跡の年代と同じ時期の遺物となる。中世では中世土師器・珠洲擂鉢と甕壺類、近世では越中瀬戸碗皿類、肥前陶磁等が採集された。17は15世紀後半～16世紀の中世土師器、18・19は珠洲焼で擂鉢と甕類の胴部である。19は成形時の円形叩打痕が明瞭である。



第8図　遺物実測図（5）（1/3）

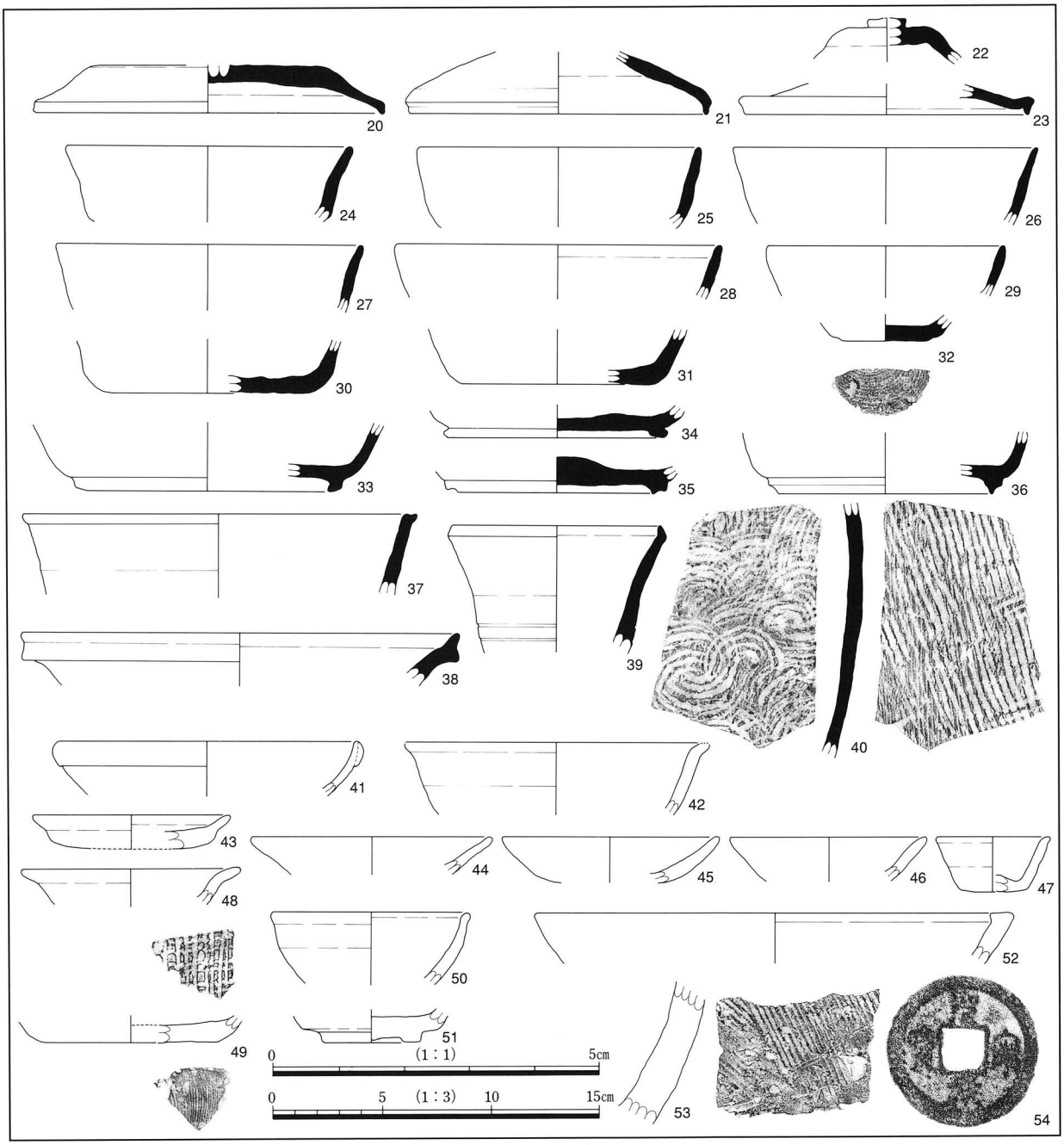
⑧本領遺跡（遺跡番号422104）：新規

新規の遺跡で遺跡範囲は南北約600ｍ、東西約560ｍを測る。採集された遺物は、縄文１点、弥生１点、古代367点、中世89点、近世以降62点、時期不明の鞴羽口１点の計521点である。縄文土器は小片であり器種は判別できない。弥生土器は高杯の口縁部、古代は須恵器杯類・甕壺瓶類・土師器、中世は中世土師器・瀬戸美濃碗皿類・珠洲・越前・八尾・青磁・白磁・渡来銭と多種にわたる内容となる。分布調査の半数以上の遺物がこの遺跡内で採集され、その大半は木舟地区と接する場所、すなわち石名田木舟遺跡・木舟北遺跡との隣接地で表採されている。遺跡西部で採集遺物数が少ないのは藁により地表面を確認できないためであり、表土を確認できる場所では遺物を多く採集している。埋没地形について不明な点は多いが、西へ遺跡が広がるのは確実と考えられる。

採集遺物のうち、20～40は８世紀代を中心とする遺物である。20～23は須恵器の杯蓋で、８世紀代

に比定されるが、23は9世紀に下る。24～36は須恵器杯である。蓋と同様に8世紀代が主体だが、36のように9世紀に下るものもある。無高台の杯A類より高台付の杯B類が多い。高台端部形態をみると外傾・平行・内傾するものが均等な比率で混在している。32の底部は回転糸切される。37～39は8世紀代の壺類である。40～54は16世紀代を中心とする遺物である。41は12世紀代の白磁碗、42は14世紀代の青磁碗である。43～47は中世土師器である。43は15世紀後半まで遡るが大半は16世紀代のものである。48～51は瀬戸美濃で天目茶碗と端反皿、卸皿がある。52・53は珠洲焼で擂鉢は15世紀前半のものである。54は北宋銭の「聖宋元寶」(1101年初鋳) である。

遺物からみた主体時期は8世紀代と16世紀代にあり、石名田木舟遺跡と深い繋がりを有する遺跡と評価できる。



第9図　遺物実測図(6)(1/3)　※54のみ1/1

Ⅱ　小　結

遺跡地図の整備は、調和のとれた町の発展を遂げる基礎資料として不可欠といえる。開発を円滑に進めるため、地域の個性を「埋蔵」する文化財を保護・活用するために、本年度から５ヵ年計画で詳細分布調査を実施する計画である。調査は田畠を歩いて遺物を採集するという地道なものであるが、採集した遺物を多面的に検討して得る情報は、遺跡把握の第一歩として重要である。既存の遺跡については、範囲の変更など遺跡を把握する精度を向上させる資料を得、これまで遺跡の存在が確認されていなかった本領地区では新たな集落遺跡を発見し、調査初年度から大きな成果を挙げることができた。

これまで、本地域における求心力は木舟城を含む石名田木舟遺跡をその筆頭に挙げることができた訳であるが、古代集落に限定するなら本領遺跡はそれに匹敵する可能性をもつことを指摘しておきたい。両遺跡は地理的に近接しており、一つの遺跡として捉えることもできようが、分布調査段階では地区境を考慮し、遺跡を分割して把握することとした。

さて、表採遺物の時期をみると、古代以前に遡るものは極めて少量であり大滝地区の集落の成立を古代に求めることができよう。この推測はこれまで近辺で実施された発掘調査結果とも矛盾するものでなく、分布調査による採集遺物の時期傾向は、想像以上に遺跡本来の時期を体現しているものといえる。分布調査結果と周辺での発掘調査事例をもとに、大づかみであるが大滝地区の集落の変遷について検討してみる。

石名田木舟遺跡・本領遺跡付近で成立した古代集落は中世前期になって一度衰退するが、中世後期になって木舟城を中心に木舟北遺跡・開酵大滝遺跡といった城下町を形成し古代を凌ぐ規模と内容を持った集落を広範囲に成立させる。ところが、1586年の大地震を契機とする木舟城の廃城は、城下町を四散させる結果を招き、急速な農村化を生じさせる。江戸時代を迎え、加賀藩政のもとで新たな近世遺跡として成立する集落も発生するが、概してその規模は小さい。近世以降の採集遺物を検討すると、17世紀後半以降のものが多く含まれており、こうした傾向は急速に開拓が進み村高が大きな伸びをみせる当地域の情勢を反映したものとなっている。その結果、集落は安定して維持されることとなり、現在の集落へと直結する枠組みが固まっていった。近世以降の表採遺物の多くが現集落内に散布していることもこのことを裏付けているといえよう。

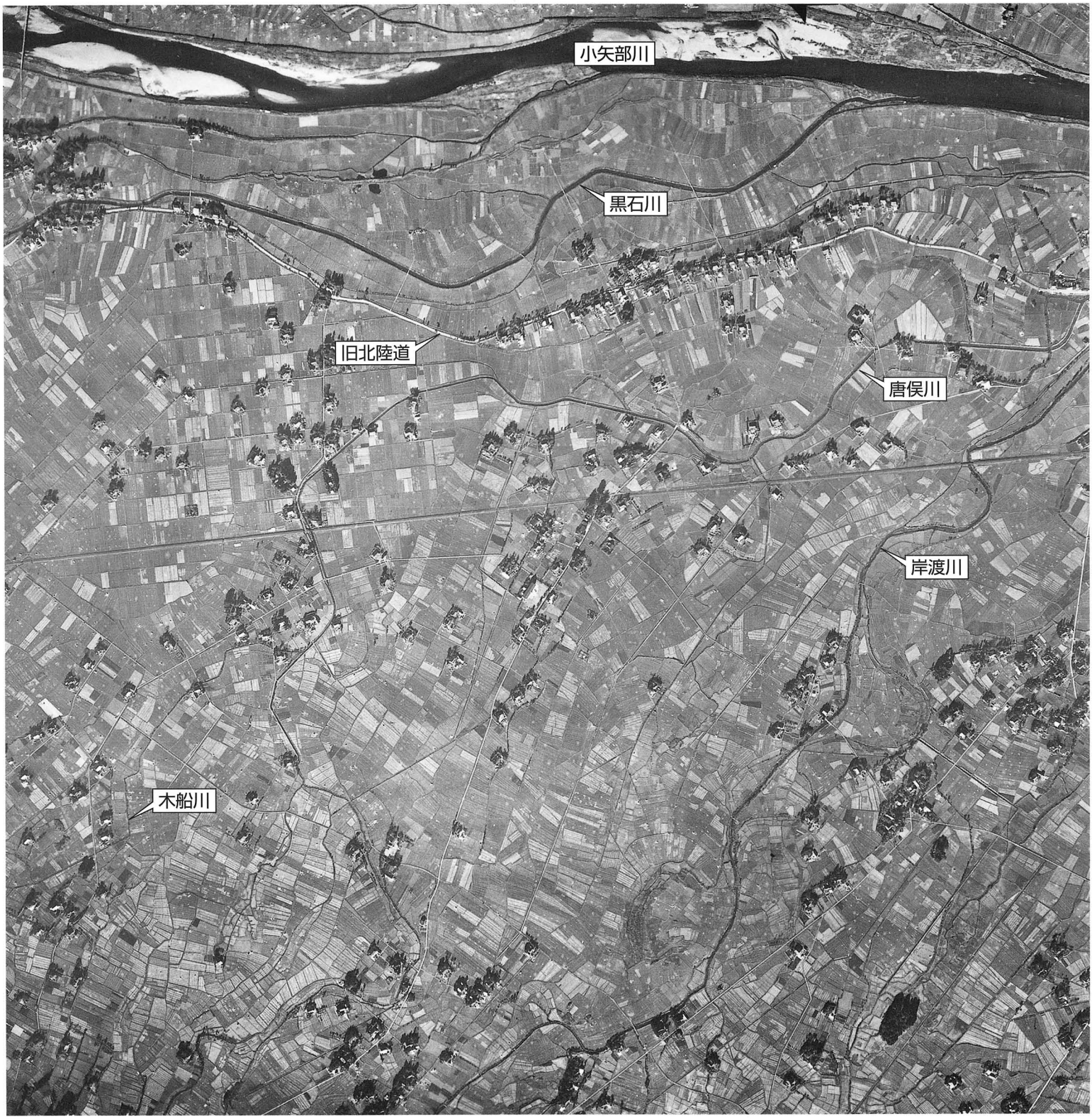
第２表　調査遺跡一覧

	遺跡番号	名　称	所在地	種別	時　代	現　況	備　考
1	422079	開酵大滝遺跡	福岡町開酵 小矢部市五社	集　落	中世・近世	IC・宅地田	範囲変更
2	422080	石名田木舟遺跡	福岡町木舟 小矢部市石名田	集　落	弥生・奈良・平安・ 鎌倉・室町・近世	宅地・田	範囲変更
3	422081	木舟城跡	福岡町木舟	城　館	中世・近世	田・公園	範囲変更
4	422084	木舟北遺跡	福岡町木舟	集　落	古代・中世・近世	宅地・田	範囲変更
5	422085	大滝遺跡	福岡町大滝	散布地	古墳・古代・中世・近世	宅地・田	範囲変更
6	422098	大滝島田遺跡	福岡町大滝	散布地	中世・近世	田	範囲・名称変更
7	422104	本領遺跡	福岡町本領	散布地	古代・中世・近世	宅地・田	新　規

①	開辟大滝遺跡
②	石名田木舟遺跡
③	木舟城跡
④	木舟北遺跡
⑤	大滝遺跡
⑥	大滝島田遺跡
⑦	本領遺跡
⑧	大滝芋田遺跡

凡　例	
	分布調査対象地
♣	縄文
♥	弥生
●	古代（●は10コ以上）
▲	中世（▲は10コ以上）
■	近世以降

第10図　2002年度分布調査成果図（1/5,500）



写真図版１　航空写真（1946年撮影）

写真図版2　遺跡写真（1）　上段：開酵大滝遺跡、下段：石名田木舟遺跡

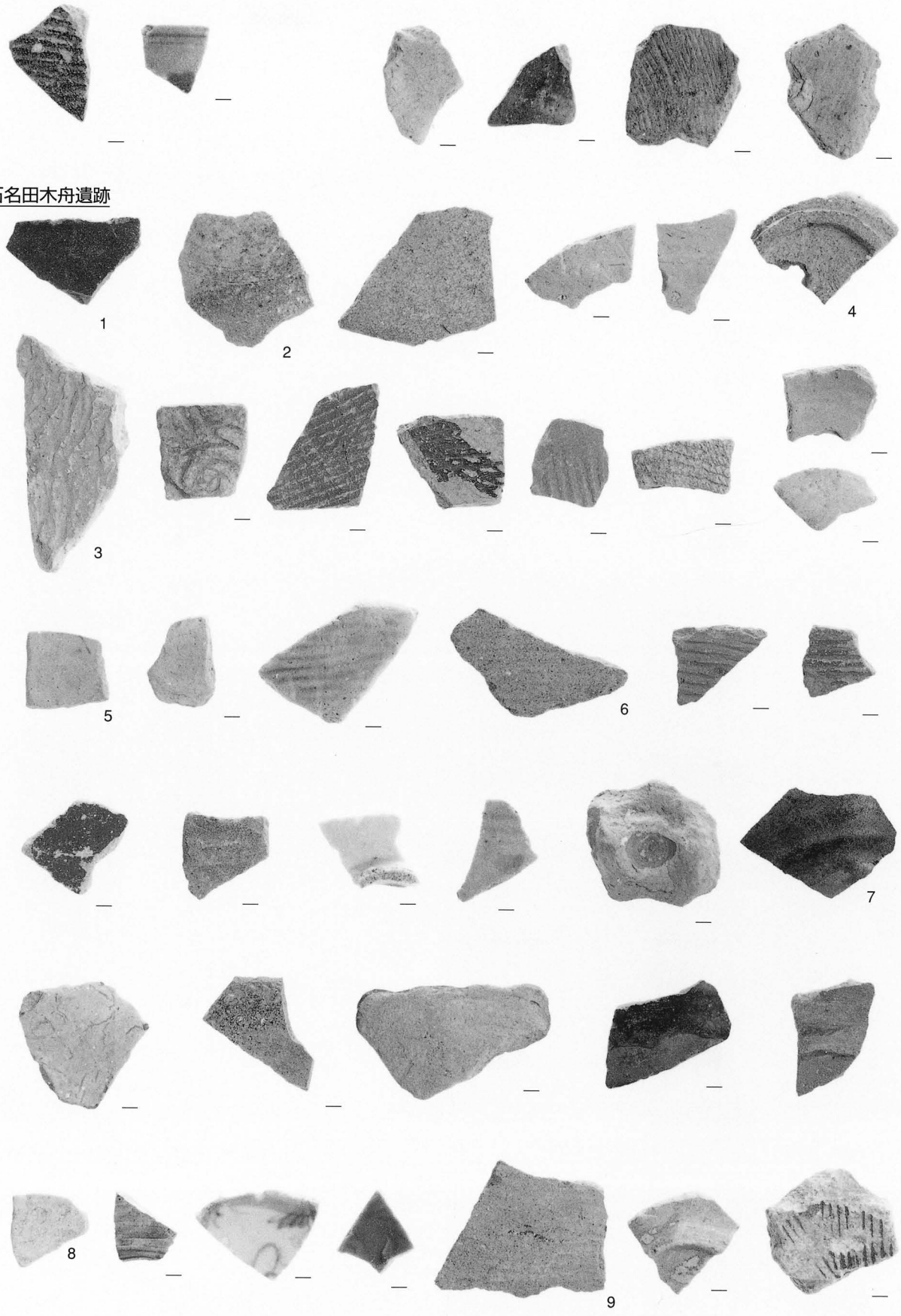
写真図版3　遺跡写真（2）　上段：木舟城跡、下段：木舟北遺跡

写真図版4　遺跡写真（3）　上段：大滝遺跡、下段：大滝芋田遺跡

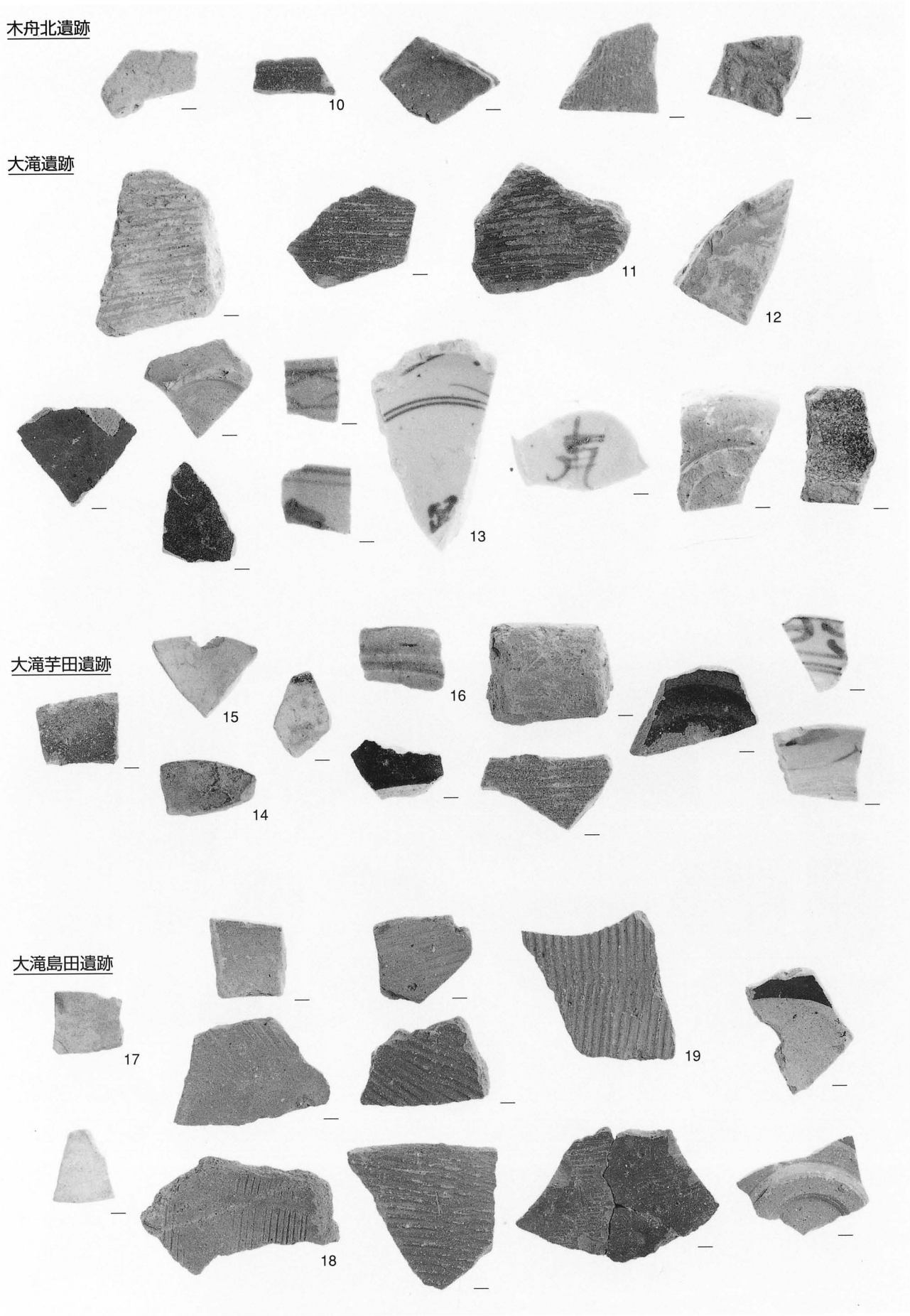
写真図版5　遺跡写真（4）　上段：大滝島田遺跡、下段：本領遺跡

開酵大滝遺跡

石名田木舟遺跡

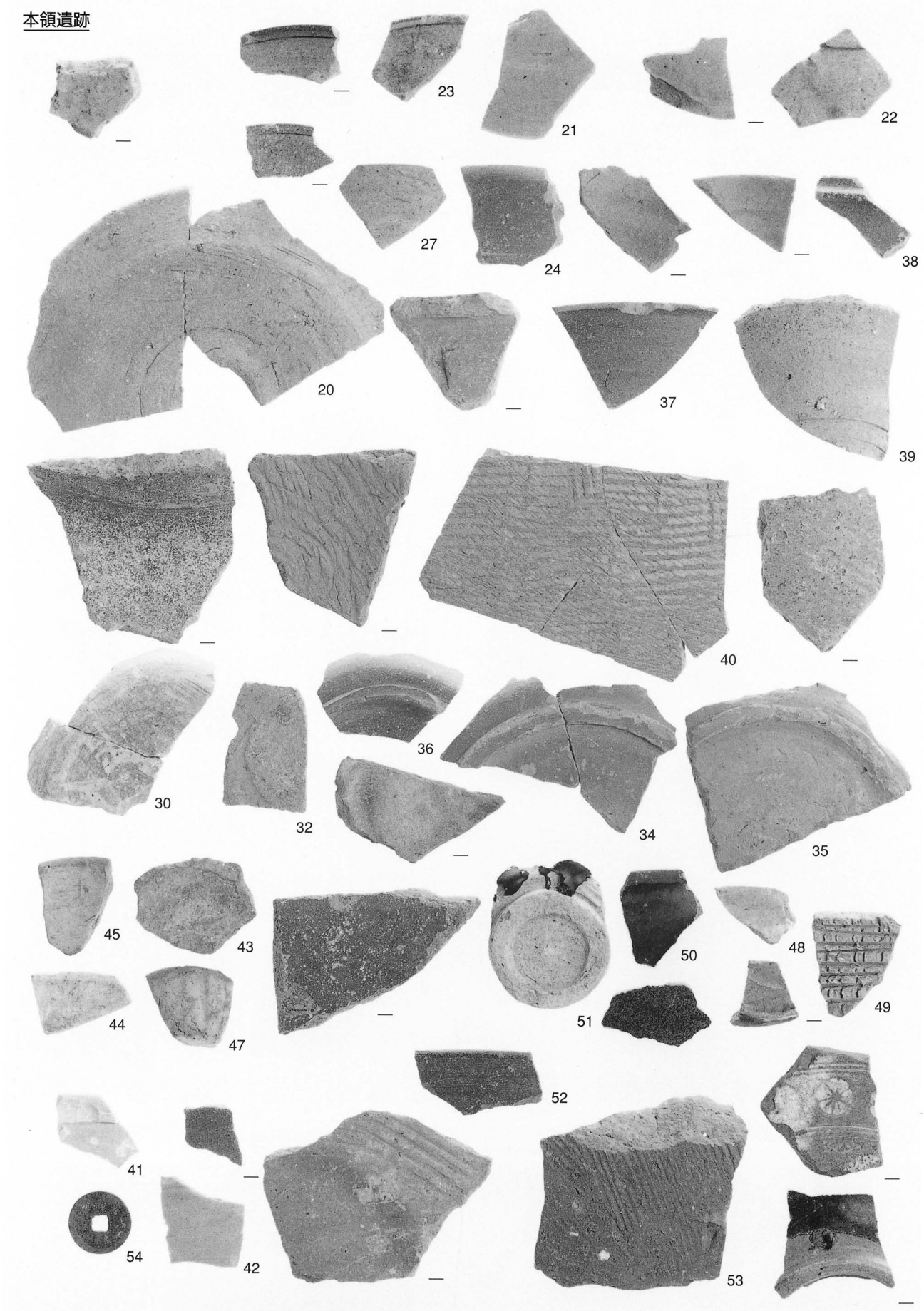


写真図版6　表採遺物　俯瞰写真（1）　※縮尺1/2



写真図版7　表採遺物　俯瞰写真(2)　※縮尺1/2

本領遺跡



写真図版8　表採遺物　俯瞰写真（3）　※縮尺1/2

報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくおかまちまいぞうぶんかざいぶんぷちょうさほうこくいち
書名	富山県福岡町埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ
シリーズ名	福岡町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	栗山雅夫
編集・発行機関	福岡町教育委員会
所在地	〒939-0132 富山県西砺波郡福岡町大滝44番地　℡0766-64-5333
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ちょうないいせき 町内遺跡	ふくおかまち 福岡町地内	16224	—	36度 42分 00秒	136度 55分 20秒	20021209 ～ 20020226	4 km²	—

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
町内遺跡	—	縄文時代・弥生時代 古代・中世・近世	—	縄文土器、弥生土器、須恵器・ 土師器、珠洲焼・中世土師器・ 瀬戸美濃・越前・八尾・白磁・ 青磁・銭貨、越中瀬戸・肥前陶磁	

※北緯・東経は本年度刊行の報告書より世界測地系を採用

富山県福岡町

埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ

発　行　日　平成15年３月31日
編集・発行　福岡町教育委員会
〒939-0132
富山県西砺波郡福岡町大滝44番地
℡0766-64-5333
印　　刷　ヨシダ印刷株式会社